

御書の系年研究（その3）

——身延期における「けかち」について——

若 江 賢 三

はじめに

- 1 建治元年における飢渴の有無について
- 2 <370>太田殿女房御返事及び<308>太田殿女房御返事の系年
- 3 弘安2年までの飢渴の推移
- 4 弘安3年以降の飢渴

むすび

はじめに

身延期には弘安元年を中心とする「大なるけかち」を含め、周辺地域には、しばしば「けかち」と称される飢饉があり、そのたびに日蓮の草庵は食糧危機に陥った。そのことが如実に消息文に反映しており、記述された消息より、その背景となる身延の地の気象や人々の食糧事情を読み取ることが可能であり、系年においても重要な手がかりとなる。まず、第1章では建治元年の状況を考察し、第2章では弘安年間に著された太田氏夫人宛の2抄の系年を考察し、第3章では、弘安2年までの飢渴の推移を概観し、第4章ではそれ以降について考察する。

1 建治元年における飢渴の有無について

身延期の消息中には、阿那律とか徳勝童子とか、飢饉のときの真心の供養に

(40)

よって、功德を得たという本生譚を記した事例が多くあり、逆に、阿那律等の名の記されていることにより、それが著された時期に飢渴があったことが知られるのである。また、麦が供養される時も、ほぼ飢饉の時である。これまでの通説で建治元年に系年される御書中では4月12日付けの<173>王舎城事において「麦の白米」の供養が記されており、<177>上野殿御返事(5月3日)及び<185>南条殿御返事(7月2日)には阿那律の本生譚が記されている。また、<252>上野殿御返事(7月16日)には「むぎひとひつ」の供養があり、これら一連の消息からは、建治元年の4月から7月にかけて、身延の地にはかなり深刻な飢饉が襲ったのではないかと、その印象を懐かせる。しかしながら、上記の諸消息の系年については、ことごとく疑問があるのである。以下、順を追って検討する。

<173>王舎城事 (p1137)

「四月十二日」付けの本抄の末尾には「麦の白米一駄(駄)」が四条金吾によって供養されたことが記されている。収穫期でもないこの時期に、はるばる鎌倉の地から、麦が1駄(4斗)も供養されることは、異常といわねばならない。諫暁八幡抄に「老人にそ食をあたへ、高人に麦飯等を奉るがごとし」とあるように、身分の高い人にこれを供すること自体が失礼なこととされており、これが供養される背景には、よほど食糧危機の状況があったからと見なければならぬであろう。そこで、本抄の系年が問題となる。

本抄は日奥及び日通が弘安元年とする他は、日諦、日明、遺文録、縮遺、定本はいずれも文永12年(=建治元年)4月12日の著述としている。ただし、『昭和と新修』及び岡元鍊城氏¹⁾が、建治2年としている。本抄には両火房の名の由来となった極楽寺と鎌倉の火災について記されている。両火というのは、岡元氏のいうように、文永12年3月25日の極楽寺炎上と建治2年1月20日の北条時宗邸の炎上をさすとするれば、本抄の著述は、その報告を受けた後の建治2年でなければならず、よって、本抄を建治元年4月に飢饉があった証拠とすることはできない。

<252>上野殿御返事（p 1512）

本抄には、「むぎひとつ」の供養が記されており、さらに
 せけんそうそうなる上、を、みやのつくらせ給へば、百姓と申シ我内の者と申シ、けかちと申し、ものつくりと申し、いくそばくこそいとまなく御わたりにて候フらむに、山のなかのすまゐさこそと思ひやらせ給ひて（中略）法華経の御いのちをつがせ給フ事、三世の諸仏を供養し給へるにてあるなり。

とあり²⁾、「けかちともうし」という表現から、その執筆時に、身延や上野の地域で「けかち」のあったことが知られるのである。「を、みやのつくらせ給へば」というのは、浅間神社の大規模な修復のあったときと思われる。

本抄は、日興本に「建治三年七月十六日」と日付が記されている。系年はこの日興本に従って何の問題もない³⁾。「けかち」の時期においても、後に述べるように、建治3年の夏から秋にかけてあったことは確かであり、逆に建治元年の秋までに飢饉があったことを認めることができないのである。

<185>南条殿御返事（p 1541）

本抄は日興本に「建治元年七月二日」と日付が記されているが、日通、日諦、日明、遺文録、縮遺はいずれも建治3年としている。『昭和新修』において浅井要隣は「興師の写本に建治元年到来と加筆されていることであるから、これに従うべきである」として「建治元年」に戻した。このことについて興風談所の『御書システム』では、日興本では、「三」と「元」が似ているが故に誤ったのであるとした。昭和定本は建治元年又は3年として、断定を避けている。

さて、本抄冒頭には「白麦一俵・小白麦一俵」の供養が記されている。本文中には加葉尊者が過去世の修行時代に麦を供養したことを記して天台の『文句』巻1⁴⁾を引き、

むかしうえたるよに、むぎのはんを一ぱひ供養したりしゆへに（中略）法華経にて光明如来と名をさづけられさせ給フ。

とあり⁵⁾、阿那律の本生譚が引かれており、本抄執筆の時点で飢饉の状況があ

(42)

ったことを思わせる。阿那律の本生譚が消息中に引かれるのは、後述のように、必ず飢饉の時である。しかしながら、筆者の本稿での考察によれば、建治元年の梅雨時以降の時点で飢饉があったことを立証することのできる遺文は確認できないのである。故に、本抄執筆時としては建治元年は適合しない。では、系年はどうすべきであろうか。

日興本に「建治三年到来」とある<246>上野殿御返事には

五月十四日にいものかしら一駄、わざとをくりたびて候。当時のいもは人のいとまと申し、珠のごとし、くすりのごとし。

とあり⁶⁾、建治3年においては、食糧としての芋が、5月中旬の時点では珠や葉の如く貴重であると記している。つまり、5月中旬より飢饉の状況があったということである。この年の7月16日の時点で依然「けかち」があったことは、前述の<252>上野殿御返事に「むぎひとひつ」の供養があったことから証される。麦の供養もほぼ飢饉時に限られるからである。さらに同年8月4日の<253>弥三郎殿御返事には

此国眼前に無間地獄と変じて、諸人現身に大飢渴・大疫病、先代になき大苦を受る上、他国より責めらるべし。

とあり⁷⁾、この年の8月初旬には大疫と共に大飢饉もあったことを物語っており、7月より飢饉が続いていたと思われる。よって、本抄の執筆時としては、この建治3年が妥当するのである。<185>について、日興に何らかの思い違いがあったのであろうか。

では、弘安元年以降という可能性は排除できるのか。弘安元年7月8日付け<300>時光御返事には、

迦葉尊者と申せし人は、仏の御弟子の中には第一にたとき人也。(中略)宅に(中略)からすき九百九十九、一のからすきは金千両。金三百四十石入れたるくら六十。かゝる大長者也。

とある⁸⁾。これは天台の法華文句卷1下⁹⁾からの引用であって、数値は正確である。ところが、同じ内容を記す南条抄に

迦葉尊者(中略)俗にてをはせし時は長者にて、くらを六十、そのくらに

金を百四十こくづつ入らせ給フ。

とある¹⁰⁾。文句に「三百四十石」とあるのが南条抄で「百四十石」となっているのは、南条抄執筆の時点では日蓮は記憶に頼って記し、それを時光御返事の時点では、修正済みであったのであろう。このように見れば、南条抄の方が前に記されたことは明らかであり、時光抄を著す前年の建治3年がその執筆時であることは動かない。建治元年も2年も、7月の時点で飢渴は認められないからである。

<177>上野殿御返事（p 1511）

本抄中にも阿那律の故事が引かれ、建治2年または建治元年（5月3日）の著述とされてきたが、「普明如来」という記別が記されていることから、本抄を弘安2年に改訂すべきことは前稿（その2）で考察した通りである¹¹⁾。

2 <370>及び<308>太田殿女房御返事の系年

建治4年=弘安元年は多雨の異常気象があり、かつ日蓮の生命が病により2度にわたって危機を迎え、それに加えて全国的に疫病が大流行した年である。故に、そうした状況をふまえることにより、系年においても多くの手がかりを得ることができる。まず、9月19日付け<306>上野殿御返事には次のようにある¹²⁾。

今年は正月より日々に雨ふり、ことに七月より大雨ひまなし。このところは山中なる上、南は波木井河、北は早河、東は富士河、西は深山なれば、長雨大雨時々日々につづく間、山さけて谷をうづみ、石ながれて道をふせぐ。河たけくして舟わたらず。富人なくして五穀ともし。商人なくして人あつまる事なし。七月なんどは、しほ一升をぜに百、しほ五合を麦一斗にかへ候しが、今はぜんたいしほなし。何を以てかかうべき。

この年（建治4年）は正月から多雨で、とくに7月から大雨が続いたという。この雨により穀物の流通が悪くなり、7月の時点では塩1升=100銭、塩5合=麦1斗（=50銭）であったから、1000銭（=1貫文）で塩だと1斗、麦だと2石が購

(44)

入できたことになる。ところが、9月19日の時点では、塩がなくなったために、麦を買うこともできなくなった。ちょうどこのとき、南条氏より塩1駄の供養が届いたので、大いに助かったというのである。

当時の穀価は 米1石=1貫文 というのが標準であった。麦は米に比べて安価であるが、仮に米との価格が半値というのが標準であったとすると、7月<まで>の時点は、麦も米も標準価格の範囲内にあったことになる。つまり、7月初頭はまだ穀貴の状況にはなく、従って、飢渴にはなっていなかったということが知られるのである。それが急激に高騰して行って、7月のある時点以降に「けかち」の状況になっていた、ということになる。翌、弘安2年1月3日の<325>上野殿御返事にも

去年の七月より大なるけかちにて、(中略) 衣もうすく食もとほし。布衣はにしきの如し。くさのはわかんろ(甘露)と思ふ。

とある¹³⁾。では、7月のどの時点から飢渴(けかち)となったのか。それを窺う遺文としては弘安元年7月7日付け<299>種物御消息に

たうじ(当時)はあめはしのをたて、三月にをよび、かわ、まさりて九十日。やまくづれ、みちふさがり、人もかよはず、かつて(糧)もたへて、いのちかうにて候つるに

とあり¹⁴⁾、7月7日の時点ではすでに飢渴の状況になっていた。かなり急激な高騰であったということになる。翌8日付け<300>時光返事には

今年は疫病と申し飢渴と申しとひくる人々もすくなし。たとひやまひなくとも飢エて死事うたがひなかるべきに、麦の御とぶらい金にもすぎ、珠にもこえたり。

とある¹⁵⁾。これは、疫病の流行、飢渴、病の3つの事柄が錯綜した記述になっているので、やや複雑であるが、解きほぐせば以下ようになる。即ち、「今年は疫病流行のために草庵を訪れる者が少なかったが、それに加えて(最近)飢渴があり(実に心細い状況であったところ)、麦1駄等を送っていただきました。これは実に貴重で、有り難いことこの上ありません」という趣旨であろう。ここから、7月8日の時点においても、当然のことながら、飢渴の状況にあった

ことが確認される。

さて、この事実は、7月初旬の日付けを有する消息の系年を解くための重要な手がかりとなる。まずは、江戸時代以来、建治元年（7月2日）とされてきた、〈370〉大田殿女房御返事（p1005）の系年を考察する。同抄は真蹟が現存し、その花押がボロン字になっている。故に、定本では弘安3年と改訂している。また、系年を考察する上で、同抄と密接な関連を有するのが、弘安元年9月24日の著述とされる同名の〈308〉大田殿女房御返事（p1018）である。後者についても、これまでほとんど系年に異説はなかった。

まず、〈370〉の本文冒頭に、「八月分の八木一石給候了ヌ。」とある。本抄は2500字を超える消息文である。ところで、この同じ弘安3年の7月2日に記されているもう1通の消息がある。それは〈371〉千日尼御返事（p1318）であり、当抄は追伸文を含めると、4000字になんなんとする、これまた大作である。千日尼抄の方は、前日の7月1日に息子藤九郎守綱が身延に来て阿仏房の墓参りをし、その翌日に彼を待たせて記したものである。したがって、そのあとで、さらにほぼこれに匹敵する長さの〈370〉大田殿女房御返事を同日中に書くというのは、時間的にも体力的にも無理なことではなかったのか、というのが最初の疑問である。

同日に複数の消息が書かれた例としては、〈294〉富木入道殿御返事（治病大小権実違目）p995、〈295〉中務左衛門尉殿御返事（二病抄）p1178、〈296〉兵衛志殿御返事p1097の3篇が弘安元年6月26日に記されている。このうち〈294〉は3000字程度、〈295〉は1000字弱であるが、両抄は関連があり、前者の追伸に「此法門のかたつらは左衛門ノ尉殿にかきて候」とあり¹⁶⁾、両抄を書き終わってからこの追伸を記したと思われる。また、〈296〉は百字弱の短いものであり、3抄が同一日の執筆になることは決して不思議ではない。しかし、〈370〉と〈371〉の場合は内容的にも、全く関連がないのである。それからもう1例。〈310〉常忍抄（富木入道殿御返事、稟権出界抄）p980（約1400字）と弘安2年の〈343〉聖人御難事p1189（約1800字）は共に「十月一日」の日付であり、同年同日のものと考えられる¹⁷⁾。常任抄は定本では山川智応説による弘安元年

説をとるが、弘安元年の10月は、後述のように、日蓮は病気のために筆が執れない状態であった。その末文に「此使いいそぎ候へばよるかきて候ぞ」とあるように、熱原の法難に際しての緊急を要する事態から、両抄同日に記されたとして不自然はないのである。しかしながら、一方、〈370〉は米1石の供養のお礼から始まるが、内容的に緊急を要するものではなく、〈371〉の千日尼御返事と同日に書かれたとは思えない。〈370〉大田殿女房御返事の系年には再考すべき余地がある。

同抄には「八月分の八木一石」が記されるが、飢渴を思わせる表現が全く見られない。花押はボロン字であるから、弘安元年以降であることは確認できる。そのうち、弘安4年及び5年については、7月の時点では日蓮は体力的に弱っていて、長文の消息を書くことは不可能な状況であった。すると、残る可能性としては、弘安元年、2年のいずれかに絞られる。それを考える上で決定的となるのが、〈308〉の系年である。

弘安元年（異説なし）の「九月廿四日」付け（平賀本）とされる〈308〉大田殿女房御返事には、

八木一石（付十合）者、大干魃の代に、かはける物に水をほどこしては、大竜王と生れて雨をふらして人天をやしなう。うえたる代に、食をほどこせる人は国王と生れて其国ゆたかなり。

とあり¹⁸⁾、このあとに、大干魃のあった波羅内国の金色王の話が記されている。しかしながら、弘安元年の8、9月は大雨の故に「飢渴」となった時期であり、干魃の話は不相応ではないか。また、この年の9月の状況を知るうえで重要なことは、9月（中旬）の本尊問答抄以降、閏10月の下旬に至るまでは他に、消息が見られず、9月、10月には御本尊も書写されていない（『真蹟集成』第十卷の「本尊集」を参照）という事実である。9月24日は病がかなり深刻な状況になっていたと思われ、400字程度とはいえ、消息文の執筆は不可能ではなかったか。なお、日意の『大聖人御筆目録』によれば、「太田入道殿御返事」として「八月廿四日御書」が記されていて¹⁹⁾、これが当抄のことと考えられ、「九月廿四日」は「八月廿四日」の誤記である可能性が大である。しかし、弘安元年の8月24日

あっても大雨は続いていた時期で、やはり当抄の執筆時期としてふさわしくない。弟子達が情報交換し、互いに協力して、一時に米1石もの供養がなされ得る態勢が整ったのは弘安期頃からと思われるが、そのうち、弘安4、5年は前述の通り、8、9月でも消息の執筆は体力的に無理な状況である。本抄執筆が弘安元年でないとすれば、残る可能性として最も大となるのは弘安2年である。弘安2年は5月3日付け前述の<177>上野殿御返事には阿那律の本生譚が引かれ、「いものかしら」の供養に対する懇切な礼が述べられている。それから2ヶ月後の7月も、3ヶ月後の8月も、引き続き飢渴の状況にあったと思われるのである。飢渴の論拠となる表現は、同じく前章で建治3年の著述であることを確認した<185>南条殿御返事と<252>上野殿御返事の中にある。即ち、7月2日付け<185>南条殿御返事には麦の供養と阿那律の故事が引かれ、さらに「山中にうえしにゆべき法華経の行者」を供養したその麦は金であり、さらには尊い法華経の文字に他ならない、と称えている²⁰⁾。続く7月16日付け<252>上野殿御返事にはやはり「むぎひとひつ」の供養を記したあと、「ともしびにあぶらをそうのごとく、かれたるくさにあめのふるごとく、うへたる子にちをあたふるがごとく、法華経の御いのちをつがせ給うフ事、三世の諸仏を供養し給へるにてあるなり。²¹⁾」と称えているのである。これらの時期が飢渴の状況にあったことは疑いないであろう。

さて、<308>が弘安2年8月（または9月）であったと仮定すれば、同じく米1石の供養を記す<370>太田殿女房御返事が弘安2年であったという可能性が排除される。接近した時期に同一の家から続けて大量の米が供養されたとは考え難いからである。すると<370>の執筆時として残るのは弘安元年のみである。弘安元年の7月2日であれば、前述したように、まだ飢渴という状況ではなかった。けれども、7月7日に記した種種物御消息では、すでに飢渴が始まっており、疫病の流行の真っ最中でもあり、先行きが不安な状況にあったのであろう。

以上の考察から、<308>を弘安2年とし、<370>を弘安元年に系年すべきという筆者の仮説は、当時の飢渴の状況に叶うのではなからうか。

3 身延期における飢渴の推移の概観

阿那律（あぬるだ、あなりち）、徳（得）勝童子について記し、あるいは麦等の供養によって飢渴の状況が知られるのであるが、本章では飢渴のキーワードとなる語を記す消息文を挙げて、その記された年代と月日とを確認しておく。（→は系年を改訂すべきことを示す。）

まず、「阿那律」について記す消息は

- <26>船守弥三郎許御書（p1446）=弘長元年6月27日、
- <175>法蓮抄（p1043）=建治元年冬²²⁾
- <177>上野殿御返事（p1511）=建治元年→弘安2年5月3日
- <185>南条殿御返事（p1541）=建治元年→建治3年7月2日
- <300>時光御返事（p1549）=弘安元年7月8日
- <369>窪尼御前御返事=弘安3年→建治3年6月27日

以上6篇である。船守抄の執筆時における状況が不明なのを除けば、他は例外なく飢饉の時であった。

次に、「徳（得）勝童子」について記す消息は

- <153>上野殿御返事（得勝、p1508）=文永11年11月11日
- <204>白米和布御書（得勝、定p1132）
- <397>王日女殿御返事（得勝、p1263）
- <207>松野殿御消息（p1380）=建治2年2月17日
- <333>窪尼御前御返事（p1481）→建治3年5月4日²³⁾
- <315>千日尼御前御返事（p1315）=弘安元年閏10月19日
- <276>上野殿御返事（p1544）建治4年→弘安2年2月25日²⁴⁾
- <326>上野郷主等御返事（定p1622）=弘安4年？1月11日²⁵⁾
- <411>南条殿御返事（p1578）=弘安4年9月11日²⁶⁾

以上の9編である。このうち、<411>南条殿御返事の記されたとされる弘安4年9月の時点で飢饉があったか否かについては直ちに確認はできないが、年代の確定できる他の5編は、すべて飢饉の時のものである

ここでひとつ気がつくことがある。それは、文永11年11月の<151>上野殿御返事、白米和布御書、王日女殿御返事では「得勝童子」となっており、建治2年2月の<207>松野殿御返事以降の6篇はすべて「徳勝童子」となっていてぶれがない、ということである。このことからすると、初期（文永11年11月頃まで）は「得勝」と記していた日蓮は建治2年以降は、「徳勝」と文字を改めたと考えられる。もしそうだとすれば、白米和布御書及び王日女殿御返事の系年は文永11年又は建治元年の可能性が大となる。王日抄については、定本が弘安3年、対照録が弘安元年としているが、真蹟（集成4-306）は断片3行しかないので、それのみからの判定は困難と思われる。もし、本抄が建治元年であったとするならば、おそらくそれは、年末に近い時期ということになるであろう²⁷⁾。

次に、これまでの通説では弘安2年に系年されている<333>窪尼御前の系年を考察する。本抄冒頭部に

当時は五月の比おひにて民のいとまなし。其上、宮の造営にて候也。
とある²⁸⁾。宮の造営とは前述の<252>に「を、みやのつくられさせ給へば²⁹⁾」とある建治3年の浅間神社の工事のことをさすと思われる³⁰⁾。

この他に、「徳勝」の名は記されずとも、「土のもち」を仏に供養した人物が阿育王となったという話は<357>上野殿御返事 p 1561、<321>衆生身心御書 p 1595、<317>九郎太郎殿御返事 p 1553、<189>高橋殿御返事（いきごのもちみ） p 1457に引用されている。<357>については日興の到来筆が弘安2年12月27日とあり、「食たへて命すでにをはりなんとす³¹⁾」とあり、弘安2年末も飢渴があったことが知られる。つぎに<321>については前稿³²⁾では建治2年5月と推定したが、供養品の「もうそうがたかな」とは、孟宗の故事に基づく表現であるとなれば、一般の筍の季節よりかなり早い時期に届けられた筍を指したと思われ、春から4月にかけての供養であったことになり、従って、本抄の執筆は4月以前となり、飢渴の時期であったことは更に確実である。次に<317>については別稿³³⁾で論じたが、弘安元年の通説を建治元年（11月1日）に改めるべきである。そしてやはり飢渴の時期であった。次に、<189>も別稿³⁴⁾で論じたが、本抄は建治3年（7月26）に改めるべきで、やはり飢渴の時期に重

(50)

なる。以上の検討から、徳勝童子にまつわる話が記される消息文は、ほぼ確実に飢渴の時期のものであったことが知られるのである。

以上の考察から、身延期における飢饉の概略を窺うことができたが、その連続性について、可能な限り、確認しておく。

身延期以前のけかちとしては、文永8年6月に大干魃があり、当然のことながら、飢饉となった。このとき良観が命ぜられて祈雨を行い、二七日経っても降らすことができなかった。続いて流罪中の文永10年には7月より石灰中がわいて、佐渡のみならず、全国的に飢饉となった。ついで佐渡流罪赦免以後では、文永11年5月11日の<144>富木殿御書に

けかち(飢渴)申すばかりなし。米一合もうらず。がししぬべし。此御房たちもみなかへして但一人候べし。

とあり³⁵⁾、5月の時点ですでに飢饉となっており、この年は空梅雨であったと思われる。7月26日の<147>上野殿御返事には

今年のけかちに、はじめたる山中に、木のもとに、このはうちしきたるやうなるすみか、をもひやらせ給へ。

とあり³⁶⁾、この年の秋までは確実に飢饉は続いていた。続く11月11日の<153>上野殿御返事には、聖人、柑子、菟藟、やまのいも、牛蒡等の供養の品を記したあと、

得勝・無勝の二童子は仏に沙の餅を供養したてまつりて、閻浮提三分カーの主となる。所謂阿育大王これなり。

と述べており³⁷⁾、この時点で食物が貴重であり、飢饉はまだ続いていたことを推測させる。しかし、その9日後の11月20日に記された<154>曾谷入道殿御書及び12年15日付けの<154>顕立正意抄には食料危機を思わせる記述は見られない。従って、文永11年の飢饉は11月中旬頃には治まっていたと見て大過ないであろう。

次は文永12年=建治元年であるが、2月16日の<164>新尼御前御返事、4月12日の<172>国府入道殿御返事を見る限り、飢饉という状況は感ぜられない。その後は、7月12日の<187>高橋入道殿御返事、8月4日の<190>乙御前御

消息、同じく8月の<193>単衣抄（p1514）、9月3日の<194>阿仏房尼御返事（p1307）、9月中の著述と思われる<196>蒙古使御書（p1472）等を見ても、その背景に飢饉があったと見なす手がかりは得られない。以上の考察によると、建治元年には、少なくとも10月以前には、大規模な飢饉があったことことは認められない。しかし建治元年（11月1日）と思われる<317>九郎太郎殿御返事には「土のもちゐ」を供養して王となった話が記され、また「やきごめ」の供養がなされており、翌年へと続く飢渴の起点はここにあったと思われる。

続いて建治2年になると、1月19日の<206>南条殿御返事に

王臣万民心を一にして一人の法華經の行者をあだまん時、此行者かんぱち（干魘）の少水に魚のすみ、万人にかこまれたる鹿のごとくならん時、一人ありてとぶらはん人は生身の教主釈尊を、一劫が間、三業相応して供養しまいらせたらんよりなを功德すぐるべきよし、如来の金言分明也。

とあり³⁸⁾、直接ではないが、干魘で魚が弱っている姿と法華經の行者が苦しんでいる様子とを重ね併せる表現であり、背後に飢饉があったことを思わせる。続いて2月17日の<207>松野殿御消息に徳勝童子の話が記されており、

文（法師品）の意は一劫が間教主釈尊を供養し奉るよりも、末代の浅智なる法華經の行者の上下万人にあだまれて餓死すべき比丘等を供養せん功德は勝るべしとの經文なり。

とある³⁹⁾。日蓮等が餓死せんとするほどの状況にあったことが窺われ、この2月の時点でも、引き続き飢饉があったことが推測される。次に3月18日<210>南条殿御返事にも、いものかしら・河のり等の供養を記したあとに

夫レ衣は身をつみ、食は命をつぐ。されば法華經を山中にして読ミまいらせ候人を、ねんごろにやしなはせ給ふは、釈迦仏をやしなひまいらせ、法華經の命をつぐにあらずや。

とあり⁴⁰⁾、これは、身延の山中の食糧不足をまざまざと思い起こさせる記述である。続いて3月30日の<212>忘持經事には

国々皆飢饉シテ山野ニ盜賊充滿シ、宿々糧米乏少ナリ。

とあり⁴¹⁾、これによれば、3月の時点で諸国に飢饉があったことが知られる。

その始まりが前年(建治元年)冬であったと考えられるのである。次に、前章で建治2年(4月12日)の系年を確認した<173>王舎城事によれば、鎌倉の四条金吾が「麦の白米1だ」を供養しており、4月の時点でも飢饉が続いていたことが知られるのである。続いて同年4月頃の執筆と見られる<321>衆生身心御書(随自意御書)には、稗の飯を供養して仏の記別(宝明如来=普明如来)が与えられた阿那律の話や、さらには徳勝童子の故事がここにも記されており、引き続き梅雨の頃まで飢饉であったことが推測される。もちろん干魃によるものであったろう。その後、建治2年には、年末に至るまで飢饉を思わせる表現は見られない。

さて、年が明けると建治3年である。5月4日の<333>雀尼御前御消息に「徳勝」が記され、5月15日の<246>上野殿御返事には「いものかしら一駄、わざとをくりたびて候。当時のいものは人のいとまと申シ、珠のごとし、くすりのごとし⁴²⁾」とあり、食糧難の故に、送りたいものがいかに貴重であったかということが知られるのである。また、6月27日の<369>雀尼御前御返事には、「阿那律」が記される。さらに前述の<185>南条殿御返事からは、7月2日の時点でかなり大規模な飢饉になっていたことが窺われ、7月16日付け<252>上野殿御返事には「むぎひとひつ」の供養が記される。次に、同年8月4日付け<253>弥三郎殿御返事(前掲)には「此の国眼前に無間地獄と変じて、諸人現身に大飢渴・大疫病、先代になき大苦を受くる上、他国より責メらるべし」とある。建治3年には春より疫病が流行し、4月10日の<242>四信五品抄に「国中の疫病は頭破作七分なり⁴³⁾」とある。8月には、すでに疫病は大流行の様相を呈しており、これと並列された「大飢渴」もこの時点で確かにあったことが知られるであろう。この飢渴はその後も続いた。建治3年の後半期の著述と思われる<168>神国王御書には「むぎひとひつ」の供養が記されており、同年末に記された<268>庵室修復書には

食なくしてゆきをもちて命をたすけて候ところに、さきにうへのどのより
いも二駄、これ一だはたまにもすぎ

とあり⁴⁴⁾、草庵では、年末に食糧事情が悪化していたことが知られるのである。

このように、文永から建治にかけて、しばしば飢饉があり、各地で凄惨な状況が現出したことは、建治4年2月13日の<274>松野殿御返事に

日本国数年の間、打チ続きけかちゆき、て衣食たへ、畜るひをば食つくし、結句人をくろう者出来して、或は死人・或は小児・或は病人等の肉を裂取て、魚鹿に加へて売りしかば人是を買ヒくへり。此国存の外に大悪鬼となれり。

と記される⁴⁵⁾通りである。

そして、身延では、雪深い冬を迎えるのであるが、年が明けて建治4年になると、干魃の続いた寒い冬から一転して、多雨で、比較的温暖な気候となった。弘安元年閏10月12日の<314>上野殿御返事によると

去今年は大えき此の国にをこりて、人の死又事大風に木のたうれ、大雪に草のおる、がごとし。(中略)しかれども又今年の寒温、時にしたがひて、五穀は田畠にみち、草木はやさんにおひふさがりて堯舜の代のごとくとあり⁴⁶⁾、建治4年春には飢渴はひとまず解消したのである。建治4年は2月29日に改元されて弘安元年となった。この年は極端に多雨の年であり、上記につづいて、

成劫のはじめかとみへて候いしほどに、八月、九月大雨大風に日本一同に不熟、ゆきてのこれる万民冬をすごしがたし。

とあるように、大雨のため、7月以降は、再び大飢饉となるのである。次に、京都妙覚寺所蔵の<291>兵衛志殿御返事では、長年反対してきた池上兄弟の父が法華経に帰依したことを愛でている。この中に徳勝童子の話が記され、飢渴の時期のものなのであった事が分かり、なおかつ農事であったことが記されている。さらに

やせやまいと申し、身もくるしく候へば、事々申サず。

とあり⁴⁷⁾、本抄は、病が再び悪化し始めた時期に記されたと思われ、それは9月下旬であったであろう。10月には再び「大事になりて候しが⁴⁸⁾」という状況になる。次に、11月29日付け<318>兵衛志殿御返事には、銭6貫文と白厚綿のこそでの供養が記された後

(54)

うえたる人には衣をあたへたるよりも、食をあたへて候はいますこし功德
まさる。こごへたる人には食をあたへて候よりも、衣は又まさる。春夏に
小袖をあたへて候よりも、秋冬にあたへぬれば又功德一倍なり。

とあり⁴⁹⁾、ことに衣の供養に対する感謝が述べられている。この記述は食糧難
が解決していたということ意味するものではない。寒さは穀物等の収穫にも多
大の影響をもたらすことは言うまでもない。本抄には、これほど寒い冬は初め
てという土地の古老たちの話が記され、そうした波はずれた寒さの故に、衣の
供養の功德の方が強調されたものであろう。その後には

きものうすく食ともしくて、さしいづるものなし。

とある⁵⁰⁾。この飢渴は弘安2年まで続く。これに加えて草庵で生活する弟子た
ちの人数が増え、食糧確保はさらに大変になって行く。

弘安2年正月3日の<325>上野殿御返事には、再び「衣うすく食とほし」と
記され

去年の7月より大なるけかちにて、さといちのむへんのものと山中の僧等
は命存シがたし。

とある⁵¹⁾ 通りである。続いて年3月26日の<329>松野殿後家尼御前御返事には

こゝに衣は身をかくしがたく、食は命をささへがたし。例せば蘇武が胡国
にありしに、雪を食として命をたもつ。伯夷は首陽山にすみし、蕨ををり
て身をたすく。父母にあらざれば誰か問フべき。

とあり⁵²⁾、本抄の執筆時が依然として寒冷であると共に、食糧危機の時期であ
ったことが知られ、本抄系年が弘安2年となるべきことも、ここに確認される
であろう。続いて4月20日の<330>上野殿御返事には

かつへて食をねがひ、渴して水をしたうがごとく、恋ヒて人を見たきがご
とく(中略)法華経に信心をいたさせ給へ。

とある⁵³⁾。これも飢饉を背景とした表現と見られる。5月4日の<333>窪尼御
前御返事には徳勝童子の故事が記されている。年代不明(5月28日付け、定本は建
治2年とす)の<218>春麦御書には、「春麦一俵」「芋一籠」「たけのこ」の供養

が記され

当時の御いもふゆのたかうなのごとし。あになつのゆきにごとならむ。とある⁵⁴⁾。飢饉であるが故に芋がいかに貴重であるかと記されており、この時の状況が知られるであろう。麦の供養も飢渴の時期に限られる。身延入山後の5月末の時点で飢饉があったのは建治3年か弘安2年である。弘安2年は年中を通して寒かったようで、筍は多くは5月の初旬に供養されているが、5月下旬にこれが供養されたのは、恐らく寒さにより、一月近く季節遅れとなったのではないか。このように見れば、本抄は弘安2年に記された可能性が大である。続いて6月20日の<336>松野殿女房御返事には「麦一箱」の供養を記し、

有待の依身なれば著ざれば風身にしみ、食わざれば命持ちがたし。

とある⁵⁵⁾。このように、弘安2年の前半が飢饉であったことは確かであり、熱原の法難を迎える秋以降の状況は必ずしも明かではないが、好転したと見られる証拠はない。ただし、弟子・檀那たちの連携により、食糧の支援態勢は整いつつあったと推測される。

続いて、前述弘安2年末、12月27日（日興本に弘安2年到来とあり）の<357>上野殿御返事には、「白米一だ」の供養を記したあと

夏あつわたのこそで、冬かたびらをたびて候は、うれしき事なれども、ふゆのこそで、なつのかたびらにはすぎず。うへて候時のこがね、かつせるときのごれう（御料）はうれしき事なれども、ほんと水とにはすぎず。仏に土をまいらせて候人仏となり

とあり⁵⁶⁾、この記述は、弘安元年11月の<318>兵衛志殿御返事と酷似している。同抄が寒さに重点が置かれているのに対し、本抄は飢えに力点が置かれる表現であり、この弘安2年末の方が飢渴の切実さを思わせる表現である。そのあとに、「衣もうすくてかん（寒）ふせぎがたし。食たへて命すでにをはりなんとす。⁵⁷⁾」と窮状が語られている。この年末も、翌弘安3年にかけて、大雪が降った。

4 弘安3年以降の飢饉

続いて弘安3年には、1月11日の<359>上野殿御返事によれば、「十字六十

枚、清酒一筒、やまのいも五十本、柑子二十、串柿一連⁵⁸⁾」の供養がなされ、食糧難であったはずの弘安2年1月3日の供養であった「餅九十枚、やまのいも五本⁵⁹⁾」とを比較して、もちの数量だけを比べると、やや少なめである。よって、弘安3年の初春には、食糧難はまだ解消していなかったと見られる。その後、少し間隔が開くが、5月2日づけ<332>新池殿御消息⁶⁰⁾に「阿育王」及び阿那律のことが記され、5月初旬までの間、身延を含む地域では引き続き「けかち」があったのではないかと推測される。5月には、新池氏によって、はるばる近江の地から3石という多量の米(八木)が届けられた。身延の地の食糧事情を知った新池氏が届けたものであろう。草庵では、ここに住む人数が増えるにつれ、必要な食糧の量も増えていた。その後、7月7日の<373>浄蔵浄眼御消息に「きごめの俵一・瓜籠一・根芋⁶¹⁾」、9月1日の<378>松野殿女房御返事に「白米一斗・芋一駄・芋一駄⁶²⁾」等、10月24日の<388>上野殿母尼御前御返事に「白米一駄⁶³⁾」の供養がなされており、11月8日づけ<390>日巖尼御前御返事には、「銭一貫文」等が送られたことを記す⁶⁴⁾が、極度の飢饉を思わせる表現は見られない。また、麦の供養が記されていないこと等を考え併せると、秋には飢渴は解消されていたと見て大過ないであろう。

次に、11月14日の八幡宮の火事のことを記す12月16日付けの<392>四条金吾許御文には、寒さについて記す記述とともに

食物は氷の如くに候へば

という記述があり⁶⁵⁾、寒冷な気候は農作物の稔りや、それに伴う食糧事情についても影響を与えたと思われる、この時点でもある程度深刻なものがあつたかと思られる。同じく八幡宮の火事について記す12月18日の<393>智妙房御返事 p 1286には、直接的に飢饉を思わせるような叙述は見られない。

そこで、次に、年末の飢饉を思わせる史料として、日興本に「弘安三年十二月二十七日」とある<394>上野殿御返事には、金色王が「大干魃」にあって、最後に残った5升の米を、すべての飢えた人々に分け与え、天がそのことを聞いて甘露を降らせたこと、また、須達長者がかつて、7度めの極貧となった時点で、5日分として残してあつた5升の米を迦葉・舍利弗・阿難・羅候羅・釈

迦の5人に次々に供養し尽くし、その功德によって、五天竺第一の長者となり、祇園精舎を供養したこと、さらには利吒が辟支仏に稗を供養した話等が、次から次へとたたみかけるように記されている。これはよほどの飢饉が背後にあったことを窺わせるものである。なかでも、「御心ざしの候へば申し候ぞ。よくふかき御房とおぼしめす事なかれ⁶⁶⁾」とあることは、系年研究の上からも重要であり、ここからも、逼迫した状況が窺われる。

ところで、故南条七郎五郎の「百ヶ日」に記されたと見られる<391>南条殿御返事 p 1573によれば「しらよね二石並びにいえのいも一だ・故五郎殿の百ヶ日等云々⁶⁷⁾」とあり（集成5-34）、2石の白米が供養されたと見られる。9月5日に死去した五郎の百箇日は弘安3年12月15日に当たり（9月・11月は大の月で10月は小の月）、前掲<394>上野殿御返事はわずかにその12日後ということになる。草庵に数十人が住んでいたのであるから、2石といえどもたちまちの中に消費され、残り少なくなっていたのであろう。同抄には

仏になりやすき事は別のやう候はず。干魃にかわるものに水をあたへ、寒氷にこごへたるものに火をあたるがごとし。又、二ツなき物を人にあたへ、命のたゆるに人のせにあふがごとし。

とあり⁶⁸⁾、このときの供養が、施主にとってもいかに貴重なものであったかを窺わせる記述である。<394>上野抄の日興本に「弘安三年」とある系年を正しいとすれば、この12月27日という押し迫った年末の時点において、身延周辺の地に飢饉が襲ったことは疑いない。

法華經の行者の山中の雪にせめられ、食ともしかるらんとおもひやらせ給ひて、ぜに一貫ををくらせ給へるは、貧女がめおとこ二人して一つの衣をきたりしを乞食にあたへ、りだが合子の中なりしひえを辟支仏にあたへたりしがごとし。たうとしたうとし。

とある⁶⁹⁾表現から、それが窺えるのである。食糧不足であれば、食糧を送るのが自然であろうが、その時に銭1貫文を送ったのには、それなりの事情があったと思われる。この年は上野家で五郎の葬儀が行われたという事情もあったが、のみならず、「公事せめあてられて、わが身はのるべき馬なし、妻子はひきかく

べき衣なし⁷⁰⁾」という状況であり、食糧を調達して直ちに運ぶための手段がなかったとも推測される。日蓮の草庵でも、弘安3年末から翌弘安4年正月にかけて、食糧危機が生じていたと思われるのである。そこで問題となるのが、弘安4年及び5年の正月に記されたとされる<400>上野尼御前御消息と<426>春初御消息である。以下にその系年を検討をする。

<426>春初御消息

春初御消息は真蹟がなく、写本としては本満寺本がある。本満寺本には、「御消息 南条殿、三郎殿、太郎大夫」と記され「ハ、キ殿カキテ候事ヨロコヒイツテ候」と端書きらしきものがあるが本文が続く。日付は「建治四年正月廿日」となっている。日通と日諦は、これによって建治4年説を取るが、日明及び遺文録以下では弘安5年に系年している。本抄系年が建治4年であり得ないことは、本文中に「深山の中に白雪三日の間に庭は一丈につもり谷はみねとなり(71)」とあり、これが弘安元年の<314>上野殿御返事の「今年の寒温とにししたがひて⁷²⁾」と矛盾することから明らかである。春初御消息の末尾は

過去の慈父は成仏疑無し。今は靈山浄土にまいりあはせ給いて、故殿に御頭をなでられさせ給うべしとをもうやり候へば、涙かきあへられず。(本満寺本、下p112)

となっている⁷³⁾。刊本録外(6-33-4)もこれを踏襲しているが、このままでは理解不能である。「慈父」というのは上野尼の実父松野殿を指し、「故殿」が上野尼の夫である南条七郎と思われるが、「故殿」が「慈父」の頭をなでるとするのは不可解である。そこで小川泰堂は遺文録において、「成仏疑無し」の後に「故五郎殿も」を挿入し、故殿に頭をなでられるのは弘安3年9月に亡くなった五郎であるとし、本抄を弘安5年に改めたのである⁷⁴⁾。何に基づいての改訂かは不明であるが、一応筋の通る解釈である。本稿では、系年の他は遺文録の説を承認し、本抄が南条時光に与えられたものとして論を進める。

さて、五郎の死去は弘安3年9月の5日のことであり、それから1年数ヶ月経た弘安5年の正月の時点で、果たして「故五郎殿も今は靈山浄土にまいりあ

わせ給いて故殿に御頭をなでられさせ給うべし」という、上記のような表現がなされるであろうか、というのが素朴な疑問である。そこで、もし本抄が（弘安5年ではなく）弘安4年の著述であったと仮定するならばどうか。そうすると、没後初めての正月となり、「今こそ靈山浄土に」という表現がふさわしく、「涙かきあへられず」もなまなましい。弘安4年の正月には「四十九日」も「百ヶ日」も既に終わっており、五郎もその時点で靈山浄土に至っていると見るのは当然であろう。ところが、本抄を弘安5年とするならば、そのことを1年以上も後になって記したことになる、不可解である。弘安4年にはまだ靈山浄土に至っていない、という認識なのであるか？

ところで、前述したように、身延周辺において弘安3年の年末は、かなり深刻な食糧危機に陥っていた。12月27日の<394>上野抄が記されてより20日後の弘安4年1月13日に記されたとされるのが<400>上野尼御前御返事である。ここには 冒頭に

聖人ひとつつ、ひさげ十か。十字百、あめひとをけ、二升か。柑子ひとこ、
串柿十連・ならびにおくり候了んヌ。春のはじめ御喜と花のごとくひら
け、月のごとくみたせ給ふべきよし、うけ給ハリ了んヌ。

とある⁷⁵⁾。ここからは、ごく平穏な正月の情景が浮かび上がる。上記を含む本文中からは、食糧危機に瀕した草庵の雰囲気は感じ取れないのではなからうか。

一方、弘安5年（1月20日）とされた<426>春初御消息には、<400>上野抄とほぼ同様の書き出しではあるが、供養の品が

八木一俵・白塩一俵・十字三十枚・いも一俵給と候了んヌ。

となっている⁷⁶⁾。米や塩や芋は別として、「十字三十枚」とあるのが、まず気にかかるところである。<400>上野抄では「むしもち」の数が百枚であり⁷⁷⁾、飢饉であった弘安2年1月3日の <325>上野殿御返事においてさえ「餅九十枚⁷⁸⁾」が供養されているのである⁷⁹⁾。当時の草庵には数十人が住んでいたことを思えば、正月の餅が30枚であれば、一人に1枚すら行き渡らない。例年の正月の供養としては、やや少ない。ここには、やはりその時の特殊事情があったであろう。日付が「正月二十日」であり、例年よりもやや遅くなっていることに

も留意したい。本抄には続いて

深山の中に白雪三日の間に庭は一丈につもり、谷はみねとなり、みねは天にはしかけたり、鳥鹿は庵室に入り樵木は山にさしいらず、衣はうすし、食はたえたり。夜はかんく鳥にことならず（中略）此御とぶらい命いきて又もや見参に入り候はんずらんとうれしく候。

とあり⁸⁰、身延の地が深刻な食料危機にあったことを語っている。ことに「衣はうすし、食はたえたり」は弘安3年末<394>上野抄の「山中の雪にせめられ、食ともしかるらん⁸¹」と符合する。つまり、本抄の記された状況は食糧危機にあった弘安3年末と接続すると思われるのである。もしそうであれば、弘安3年の年末にその窮状の中で南条時光が、何とか米と芋と塩とを手配し、正月のむしもち30枚と共に、正月の20日の時点で身延の草庵まで届けた、ということになるであろう。<394>上野抄には

御心ざしの候へば申し候ぞ。よくふかき御房とおぼしめす事なかれ。

とある⁸²。この表現には注意深い吟味が必要である。あるいは弘安3年末に南条氏からの申し出があり、それを「心ざし」と表現したものではないか。それに対して日蓮がその「心ざし」を受け入れるべく、窮状を訴えて食糧援助を依頼したのではなかろうか。その依頼したことに対して「よくふかき御房とおぼしめす事なかれ」と弁明したとも考えられる。ともかく、なんらかのかたちで食糧支援の依頼がなされたのであろう。

以上のような文脈で、春初御消息を弘安4年の執筆と解するならば、前掲の疑問は解ける。即ち、弘安4年の正月、前年に亡くなった五郎は、晴れて父と霊山で対面を遂げているに違いない、と母親を励ました内容と理解して、何の違和感も残らないのである。

<400>上野尼御前御返事

さて、春初御消息を弘安4年の正月の執筆とするならば、前述の<400>上野尼御前御返事と同月に記したことになる。同じ月に母と息子が別々に正月の祝いを届けたとは考え難い。とするならば、<400>上野尼抄の系年を再検討する

ことによって、春初御消息の系年の検証も可能となるはずである。上野尼は弘安3年末の時点では、16歳の息子を亡くしたことにより、悲嘆にくれていた。そのことは四十九日の過ぎた10月24日の上野母尼御前御返事に

さける花はちらずして、つぼめる花のかれたる。をいたる母はとどまりて、わかきこはさりぬ。なさけなかりける無常かな、無常かな。

とある⁸³⁾ 表現からも窺われる。上野尼にとっては、年末から年始にかけて、寝ても覚めても我が子五郎への思いで一杯であったと推測される。しかるに年明けの正月の消息に

抑モ故五郎殿の御事こそ、をもいいでられて候へ。

とある⁸⁴⁾ のでは、その時点での母の思いにそぐわないのではなからうか。「思い出」というのは一旦忘れ去られた後に「思い出」となる。ある程度の期間を経て、一旦意識が薄らいで以降にこそ「をもいいでられて候へ」という言葉かけがなされるものではないか。

さらに、本抄が息子を亡くしてわずか4ヶ月の母親へ宛てたものとしては、腑に落ちないのが次の一節である。

経文には子をばかたきととかれて候。それもゆわれ候か。梟と申スとりは母をくらう。破鏡と申すすけだものは父をがいます。あんろく山と申せし人は、師史明と申す子にころされぬ。

とある⁸⁵⁾。我が子を思慕してやまない時点での母親に対する話としては、少しきつすぎる。歴史上、子が親を殺した例がいくつもある、というのである。意図としては「子は財と申す経文もあり」を語るための導入として語られたはずであるが、こうした表現は、息子の急死から時間をおいて、ある程度平静さを取り戻した頃に語られるべき物語といえないであろうか。上記の歴史故事は『宝物集』に記されるもので、同じ内容が弘安3年（7月2日）の<371>千日尼御返事にも記されている、我が子藤九郎が前年3月21日に亡くなった阿仏房の遺骨を携えて身延に参詣したときに、千日尼と藤九郎の為に日蓮が書き記したものである。子を亡くした上野尼と立場は違うが、しかし、家族の別れという情については共通のものがある。千日尼抄は阿仏房没後16ヶ月目のものであつ

た。このことをヒントにすると、<400>上野尼抄が弘安5年に執筆されたという経過が見えてくるのではなからうか。つまり、弘安5年の正月であれば、五郎が亡くなってより17ヶ月目ということになり、この頃になれば、上野尼も我が子の死を受け入れ、来世への希望をもって追善しつつ、主体的に余生を生きぬいて行く覚悟が定められていたのではなからうか。

次に、本抄を弘安5年とすべき、さらに決定的な表現と思われるのが次の一節である。即ち、「子はたから」と記した後に

いやなくさきにたちぬれば、いかにやいかにや、ゆめか、まほろしか、さめなん、さめなんともへども、さめずして、としも又かへりぬ。いつとまつべしともをほへず。

とあり⁸⁶、「としも又かへりぬ」という表現は、2回目の正月を迎えた、ということの意味するはずである。種種御振舞御書には

諸宗の違目と法華經の深義を談ずる程に、年もかへりぬ。

とあり⁸⁷、流罪の2年目(文永9年)の年が明けたことを表現している。両者を比較すれば、上野尼抄の「又」が単なる助辞ではなく、「さらに(もう一年)」の意であることは明らかであろう⁸⁸。日蓮は、かつて五郎の四十九日の折の消息において、

乞ヒ願わくは悲母我子を恋しく思食し給いなば、南無妙法蓮華經と唱へさせ給いて、故南条殿、故五郎殿と一所に生れんと願はせ給へ。

と上野尼に記している⁸⁹。だからこそ1年半を隔てた時点での次の一節が強く上野尼の胸に響くのだと思われる。即ち

いつとまつべきともをほへず(中略)やすやすとあわせ給フべき事候。釈迦仏を御使ヒとして、りやうぜん浄土へまいりあわせ給へ。若有聞法者無一不成仏と申して、大地はささばはづるとも、日月は地に墜チ給フとも、しをはみちひぬ代はありとも、花はなつにならずとも、南無妙法蓮華經と申す女人の、をもう子にあわずという事はなしととかれて候ぞ。いそぎいそぎつとめさせ給へつとめさせ給へ。

とある⁹⁰ 励ましである。日蓮の励ましは、前のものとセットになっていて、時

に応じての適切な表現となっている。故に弟子たちの胸にしっかりと届くのであろう。

以上のように解するならば、<400>上野尼御前御返事は、弘安5年に記された消息であることが理解されるのではなかろうか。本抄には花押が残されており⁹¹⁾、弘安5年とすることにさほどの違和感はないと思われる。そうすると、（弘安5年ではなく）弘安4年の正月に記されたのが<426>春初御消息となるであろう。このように順序を変えることによって、南条家の五郎死去をめぐる一連のストーリーも理解でき、併せて弘安3年末から4年正月にかけて、身延に飢渴があったという事実とも矛盾なく理解が可能となるのではなかろうか。

以上により、弘安3年末から弘安4年正月にかけて飢渴のあったことがほぼ明かと思われるが、弘安4年の夏以降については史料不足の故に不明である。

むすび

本稿での考察から、系年を確認しまたは改訂すべきことが明らかになった御書は以下の17篇である。

- <173>王舎城事 p 1137→建治2年4月12日
- <252>上野殿御返事 p 1512 = 建治3年7月12日
- <185>南条殿御返事 p 1541→建治3年7月2日
- <204>白米和布御書（定） p 1132→建治元年冬
- <397>王日女殿御返事 p 1263→建治元年冬
- <333>窪尼御前御返事→建治3年5月4日
- <217>宝軽法重事→建治3年5月11日（注30を参照）
- <168>神国王御書 p 1516 = 建治3年秋頃
- <291>兵衛志殿御返事→弘安元年9月（～10月）
- <370>太田殿女房御返事 p 1005→弘安元年7月2日
- <308>太田殿女房御返事 p 1018→弘安2年8月24日
- <310>常忍抄 p 980→弘安2年10月1日
- <329>松野殿後家尼御前御返事 p 1390 = 弘安2年3月26日

<218>春麦御書 = 弘安 2 年 5 月 28 日

<394>上野殿御返事 p 1574 = 弘安 3 年 12 月 27 日

<400>上野尼御前御返事 p 1575 → 弘安 5 年 1 月 13 日

<426>春初御消息 p 1585 → 弘安 4 年 1 月 20 日

注

- 1) 岡元鍊城『日蓮聖人遺文研究第一卷』1992、p 332を参照
- 2) p 1512、定pp1365-6
- 3) 拙稿「御書の系年研究（その2）」東洋哲学研究所紀要22、2006を参照
- 4) 「阿那律（中略）昔於飢世、贈辟支仏稗飯、獲九十一劫、果報充道、名無貧。」（大正蔵34-15a）
- 5) p 1541、定 p 1078
- 6) p 1537、定 p 1305
- 7) p 1450、定1368
- 8) p 1550、定 p 1533
- 9) 大正蔵34-10a
- 10) p 1541、定 p 1079、集成6-19
- 11) 注（3）に同じ。
- 12) p 1551、定pp1571-2
- 13) p 1554、定 p 1621
- 14) p 1549、定 p 1531
- 15) p 1550、定 p 1534
- 16) p 995、定 p 1517
- 17) 両抄が同じ日に書かれたことについては岡元鍊城氏の考察がある。同氏前掲書の第Ⅱ章「日蓮聖人書状『富木入道殿御返事』（『粟権出界抄』系年考）」
- 18) p 1018、定 p 1587
- 19) 定 p 2745
- 20) pp1541-2、定pp1079-80
- 21) p 1512、定pp1365-6
- 22) 法蓮抄が建治元年冬の著述であったことは、注（33）拙稿を参照
- 23) 本抄中に「上宮の造営」が記されるが、浅間神社の造営は、建治3年のことであった。後述。
- 24) 注（3）に同じ
- 25) 「昔の徳勝童子は土のもちみを仏にまいらせて一閻浮提の主となる。今の檀那等は二十枚のもちみを法華經の御前にさゝげたり。後生の仏は疑いなし。なんぞ今生に

そのしるしなからむ。恐々。正月十一日 上の、がうす等のとのばら 日蓮 花押」（定p 1622）とあるのがその全文である。高知要法寺に真蹟あり。定本は系年を弘安2年とする。署名の蓮字ががV字型に跳ね上がっていることから弘安5年のものとも考えられるが、弘安4、5年の花押等は、事例が少ないために、そのみで系年を判断するのは危険である。筆者は本抄を弘安4年のものと理解する。

- 26) 本抄は真偽に問題あり。「土の餅は物なれねども仏のいみじく渡らせ給へば、かくいみじき報いを得たり p 1578」という表現は他には見られない。
- 27) 建治2年の春から夏にかけて飢渴のあったことは後述のとおりであるが、その起点は前年末にあったと思われる。
- 28) p 1481、定 p 1645
- 29) p 1512、定 p 1365
- 30) なお、大宮の工事のこと等を気遣って西山氏にあてた「五月十一日」付け<217>宝軽法重事にも「当時はくわんのう（勸農）と申シ、大宮づくりと申シ、かたがたの民のいとまなし p 1476、定 p 1180」とある。本抄も従来弘安2年とされてきたが、これも、同じく建治3年である可能性が大である。
- 31) p 1562、定pp1721-2
- 32) 注（3）に同じ
- 33) 拙稿「日蓮文書の系年研究——道場神守護事、法蓮抄、九郎太郎殿御返事について——」（愛媛大学人文学会『人文学論叢』9、2007）を参照
- 34) 拙稿「蒙古襲来の伝聞を巡って一日蓮遺文系年研究——」（愛媛大学人文学会『人文学論叢』8、2006）の注（35）を参照
- 35) p 964、定 p 809
- 36) p 1507、定 p 819
- 37) p 1508、定 p 835
- 38) p 1529、定pp1137-8
- 39) p 1379、定 p 1141
- 40) p 1530、定 p 1146
- 41) p 977、定 p 1151
- 42) p 1537、定 p 1305
- 43) p 342、定 p 1299
- 44) p 1542、定 p 1411
- 45) p 1389、定 p 1441
- 46) p 1552、定 p 1596
- 47) 定 p 1507
- 48) p 1099、定 p 1606
- 49) p 1098、定pp1604-5
- 50) p 1098、定p1606

- 51) p 1554、定 p 1621
- 52) p1393、定 p 1631。<329>松野殿後家尼御前御返事の真蹟はなく、日朝本及び録内御書には年号は記されておらず、本抄は弘安3年である可能性も残されている。本抄中に「日本と天竺とは二十万里の山海をへだて」とあり、日本—天竺間の距離を「二十万里」としている。日蓮は文永9年7月の<110>真言見聞以前、及び弘安3年5月の<332>新池殿御消息以降では、これを「十万(余)里」としている。「二十万里」とするのは文永10年11月の<132>乙御前母御書より弘安元年<305>妙法比丘尼御返事までである。従って、本抄が<332>新池殿御消息より以前に著されたことになり、可能性としては弘安2年か3年ということになる(弘安元年3月は病気のために長文を記すことは難しい)。ところで、弘安3年1月執筆の<360>秋元御書では、日本の寺の数を「一万一千三十七所」とし、それまでの「十七万一千三十七所」という数値を改めている。また、日本の総人口を「四十九億八万九千六百五十八人」とし、男女別数値についても初めて記している。恐らくは、秋元御書執筆の直前に、日本やアジアの地誌等を詳しく調査し、新たな知見を得ていたであろう。日本—天竺間の距離についても、その折りに再確認したのではないか。このように見れば、本抄執筆は秋元御書より前であり、弘安2年の3月であったという推定が成り立つ。詳しくは後稿で。
- 53) p 1558、定 p 1637
- 54) p 1410、定 p 1180
- 55) p 1394、定 p 1651。なお、前稿(その1)において本抄を弘安元年と推定し、このときの日蓮の病は6月に第1回目の山を迎えたとしたが、これは誤りで、6月初旬にはすでに回復期に入っていたと思われる。本抄の記された弘安2年の病状については詳しく分からないが、熱原の法難への対処等で多忙であったと思われる。近く発表予定の拙稿「身延期における日蓮の病について」を参照
- 56) p 1561、定 p 1721
- 57) p 1562、定 pp1721-2
- 58) p 1562、定 p 1729
- 59) p 1554、定 p 1621
- 60) <332>新池殿御消息を弘安3年とすべきことは前掲拙稿を参照
- 61) p 1396、定 p 1768
- 62) p 1395、定 p 1792
- 63) p 1568、定 p 1810
- 64) p 1262、定 p 1819
- 65) p 1195、定 p 1821
- 66) p 1574、定 p 1828
- 67) p 1573、定 p 1820
- 68) p 1574、定 p 1828

- 69) p 1575、定 p 1830
- 70) p 1575、定 p 1830
- 71) p 1585、定 p 1908
- 72) p 1522、定 p 1598
- 73) p 1585、定 p 1908
- 74) 高祖遺文録30卷42頁
- 75) p 1575、pp1857-8
- 76) p 1585、定 p 1908
- 77) p 1575、定 p 1857
- 78) p 1554、定 p 1621
- 79) <325>上野殿御返事 p 1554冒頭に「餅九十枚九」とあり、本文末部にも「十字九十枚、満月の如し」とあり、「餅」と「十字」とは同一のものを指していると思われる。
- ?(80) p 1585、定 p 1908。本文中に「かんく鳥」が記されているが、弘安4年2月の新池御書 p 1440にも「寒苦鳥」として記される。同じ説話からの引用は、しばしば近接した時期の消息文中に現れる。春初御書が弘安4年1月20日執筆とすれば、新池御書はわずかその10日余り後に記されたことになる。新池御書系年については注3 拙稿。
- 81) p 1575、定 p 1830
- 82) p 1574、定 p 1828
- 83) p 1573、定 p 1817
- 84) p 1575、定 p 1858
- 85) p 1575、定 p 1858
- 86) p 1576、定 p 1859
- 87) p 917、定 p 973
- 88) 前掲<318>兵衛志殿御返事に「ごごへたる人に食をあたへて候よりも、衣は又まさる。春夏に小袖をあたへたて候よりも、秋冬にあたへぬれば又功德一倍なり」とある。注(49)に同じ。「又」が「さらに」の意で用いられる例である。
- 89) p 1570、定 p 1813
- 90) p 1576、定 p 1859
- 91) 『真蹟集成』9巻97頁。注(25)を参照されたい。

（わかえ けんぞう・委嘱研究員）

A Chronological Study of Nichiren's Writings (3): On Famine during the Period He Lived in Minobu

Kenzo Wakae

After Nichien entered in Minobu, there was a famine in 1274. From the end of 1275 to the rainy season of 1276, there also was a big famine. In 1277, there was a famine by drought from May untill the end of the year. On the contrary, the year 1278 saw a famine caused by too much rain from July which continued intermittenly untill 1280. Toward the end of 1280, there was a severe famine in Minobu area which continued untill spring of 1281. We can ascertain such information from the letters of Nichren during he lived in Minobu.